内外交差点

旅の思い出のメインは人

イギリス・ベルギーのタクシー事情

森田　玲子氏（姫路タクシー社長） 第8／12回

私は今、機上の人である。トランジットのドバイから関空へ向かっている。今回は日本を離れイギリスとベルギーの旅行記をお伝えしたい。

この度、姫路市と姫路商工会議所から総勢13人がイギリスのウェールズを訪問した。2019年、姫路市とウェールズはユネスコの２つの世界文化遺産、北ウェールズのコンウィ城と兵庫県の姫路城が史上初めて唯一の姉妹城として提携された。このようにご縁のできたウェールズは再生可能エネルギーの先進地域でもあり、今回はそれに関する視察と友好親善が目的であった。

イギリスのロンドンはいらした方も多いかと思うが、ウェールズとなると、そう馴染みがないかもしれない。スタジオジブリの宮崎駿監督はウェールズが大好きで、彼の地にインスピレーションを得て「天空の城ラピュタ」が生まれたと言えば少しイメージが湧くかもしれない。

我々使節団は大きな歓迎を受け、実りある視察と更なる友好を深め、ウェールズを後にロンドンへバスで移動した。今イギリスではバスの手配が非常に困難である。コロナ以降に中型・小型バスは激減し、ドライバーも多く離れてしまったらしい、その上にイギリスのバスの運転者の１日当たりの拘束時間は最長13時間である。今回の２日間貸切する料金も目が飛び出るような金額であった。コロナ後の変化は世界共通のようだ。

ロンドンで姫路視察団と最後の晩餐の翌日、私は別行動でベルギーのブリュッセルに向かった。ホテルからユーロスターの駅まではいわゆるロンドンタクシーに乗車する。前日にコンシェルジュに翌朝のタクシーを予約しようとしたが、その時間ならホテルの前に必ずあるので必要ないと言われ、その通りベルボーイがタクシーに案内してくれた。バスのようなタクシー不足の心配はなかった。車内はＪＰＮタクシーよりかなり広い。車内掲示物はＳＨＥＩＮの広告と、ＧｏｏｇｌｅのＱＲコード、「電子決済できるが現金の方が良い」という内容の貼り紙くらいであった。運転者は非常に親切丁寧で料金はなんとも思わなかったが、ブリュッセルまでのユーロスターは当日発券したとはいえ東京～名古屋間の距離とほぼ同じで約４万円。のぞみならグリーン車でも１万5000円である。まあ高くは感じたが、２時間でユーロスターは私を第２の故郷ブリュッセルに連れて行ってくれた。

南駅着、懐かしさが込み上げてくる。2004年から５年間を過ごした地。15年ぶりに降り立ったブリュッセルはいつものように雲が低く垂れ込めグレーがかった空気は変わることがない。ベルギー訛りのフランス語、ベルギー人の顔である。トラムとバスを乗り継いで以前住んでいたアパートまで行った。メトロ、トラム、バスを乗り継ぐのだが、全て電子決済である。ちなみにベルギーに改札はない。そのせいもあって車両内の物乞いも健在であった。当時はジプシーと名乗っていたが、今回出会った女性はウクライナ人と言っていた。

私はどこに行ってもタクシーに乗るようにしているので、この度もアントワープ（フランダースの犬で有名なルーベンスの絵を所蔵する大聖堂がある）とブリュッセルでタクシーに乗った。まずアントワープの駅前に並ぶ（路駐）タクシーは殆どがベルギー人ではなかった。私が乗車したタクシーはメーターが付いておらず最初に料金を提示された。彼はソマリア人で９歳を頭に４人の子どもがいて、２年に１度は子どもに母国の文化に触れさせるために帰国していると。異国で暮らすことの苦労は何かと聞くと、全てはベルギー人が優先されて自分達は後回しにされることが不利だと語った。いくつかの日本語を教えてほしいと言われたが、降車するまでに完璧に覚えていたのが印象的だった。

一方、ブリュッセルで乗車したタクシーはベルギー人ばかりだった。一番長く乗った空港までのタクシー運転者は副業で週３日はバスに乗務しているとのこと。彼が言うに６年前くらいに移民もタクシー運転手ができるような法改正がされてから稼げなくなり、運転者が減ってしまったと。私が日本でタクシー会社を経営していると話すと、そんなことならマダムの会社でぜひ働かせてほしいと、楽しい会話をしながら空港まで送り届けてもらった。

多民族国家の一面を感じたが、どの運転者も親切だった。旅の思い出のメインは人の思い出である。全世界のタクシー運転者が少しでもハッピーでありますようにと思いながらブリュッセルを後にした。